

# 高大接続を視野に入れた探究型初年次専門科目の設計と評価：京都大学教育学部「教育研究入門」における実践(2)

○山田剛史（京都大学高等教育研究開発推進センター）  
服部憲児（京都大学大学院教育学研究科）

## 問題と目的

大学入学者選抜の改革や次期学習指導要領の改訂を控え、中学・高等学校におけるアクティブラーニングの導入が急速に進んでいる。大学入学前に多くの生徒が探究科目を含む多様な AL 型授業を経験する状況下で、大学の授業とりわけ大学への移行・適応を促す初年次教育の在り方にも変革が求められる。今回の改革は、高校と大学の教育の在り方（学生の学び方）を「接続」という視点から質的に転換することに意味がある。京都大学では、新しい時代に対応するための新たな入試（特色入試）が全学的に検討され、平成 28 年度入試から導入された。加えて、教育学部 1 回生の必修科目（専門科目）として実施してきた「教育研究入門 I・II」を、平成 28 年度から探究型科目へと内容・方法ともに刷新した。具体的な授業の設計・内容については服部・山田（2017）で、特色入試の効果検証を中心に分析したアセスメントの結果については楠見他（2017）で紹介されている。

本研究では、当該授業の効果検証（授業改善）、特色入試の効果検証（入試改善）、データに基づく教育改善の推進（内部質保証）の 3 つの機能を推進するべく設計・実施した学生へのアセスメントの結果を取り上げる。具体的には、(1) 高校時代の探究活動の有無による学習成果の獲得感の差異、(2) 当該科目の課題（探究活動）に対する関与、(3) 授業前後による学習スタイル、学習成果の獲得感の差異について検討を行う。

## 方法

**調査対象** 教育学部 2016 年度入学生（1 回生）63 名

**調査方法・時期** 量的調査（プレ調査 4/12、ポスト調査 8/2）、質的調査（コンセプトマップ 6/14、8/2）、学生・TA のコメントシート（毎授業）のうち、量的調査の結果を使用。

**量的調査の主な内容** [プレ調査] a.受験区分、b.高校時代に受けた教育プログラムの経験、c.学習スタイル（13 項目 4 件法）、d.進学動機、e.学習成果の獲得感（11 項目 4 件法）、f.不安・心配事、g.進路選択など、[ポスト調査] h.授業満足度、i.授業外学習時間、j.課題（探究活動）への関与（9 項目 4 件法）、k.学習スタイル（c と同様）、l.学習成果の獲得感（e と同様） など。このうち、下線の項目を分析に使用する。

## 結果と考察

### (1) 高校時代の探究活動の有無による学習成果の獲得感の差異（項目 b、e、l）

大学入学前にどのような教育プログラムを受けてきたのか。長期（3 ヶ月以上）にわたる調査・研究活動、学部教員による講演や出前講義、文系・理系の各種コンテスト、SSH や SGH、留学経験（3 か月以上）など 8 項目で経験の有無を聞いている。ここでは、上記のどれも経験していない学生（49.2%）といずれかを経験している学生（50.8%）の 2 群

に分けて、学習成果の獲得感を検討する。経験ありの学生は 11 項目全てにおいて相対的に高い値を示していた。特に高かった項目 (0.5pt 以上) は、ルールに基づきレポートを書く力 (0.5pt)、プレゼンテーションをする力 (0.5pt)、時間管理をする力 (0.8pt) であった。次に、経験の有無によるプレ・ポストの得点 (11 項目の合計値) を比べると、経験あり群は 29.0 から 29.7 へ (0.7pt 上昇)、経験なし群は 25.5 から 28.0 へ (2.5pt 上昇) していた。プレ・ポストいずれも経験あり群の方が絶対値としては高いものの、経験のない学生の方がより高い変化を示していることから、大学入学までの経験の差を埋めて、大学での学びを円滑に進めるための基礎づくりに当該授業が寄与していることが示唆された。

### (2) 当該科目の課題 (探究活動) に対する関与 (j)

当該科目は高校における探究活動と大学における研究活動とをつなぐ役割を果たすべく設計されている。今回の調査では、学生の課題 (探究活動) への関与度を把握するべく、学習内容と日常とのつながりや学問分野と結論との関連性、テーマの適切な選択など 9 つの項目を取り上げた。とても当てはまるとある程度当てはまるを合計し、割合の高かった上位 3 項目は、「今回の探究では扱えなかった点や言及することが出来なかった点 (限界点) を明確にした」(81.0%)、「適切なソースからの情報を総合的に扱った」(75.9%)、「ある状況で得た基本的な知識・スキル・方法論などを、この授業の課題に応用した」(67.3%) であった。逆に最も低かったのは「時間内に扱いきれるテーマを選んだ」(25.8%) であった。探究活動という接続を意識しつつも、大学における専門研究の違いや難しさを感じ取ってもらうことも今回の授業設計の意図に含まれている。

### (3) 授業前後による学習スタイル、学習成果の獲得感の差異 (c、e、k、l)

学習へのアプローチや動機づけなどの学習スタイルが、授業実施前後でどのように変化したのか。13 の項目中、特に上昇変化したのが、「理論、解釈や結論が授業や文献の中で提示されたとき、それを支持するエビデンス (証拠・論拠) があるかどうか判断しようとする」(0.25pt)、「授業で新しい概念を理解しようとするときにはよく、それを実際の状況や日常の出来事に関連させている」(0.18pt)、次いで「授業の課題を仕上げるために他の学生と協働するようにしている」(0.13pt) であった。逆に、「学習をするときは、授業の内容を何度も繰り返して覚えるようにしている」といった浅い学習アプローチについては、下降変化 (0.21pt) している。次に、学習成果の獲得感が、授業実施前後でどのように変化したのか。11 項目中ほとんどが上昇変化しているが、特に大きなものとして、「ルールに基づきレポートを書く力」(0.53pt)、「プレゼンテーションする力」(0.44pt)、「文章を要約する力」(0.34pt) があげられる。逆に、変化しなかった「時間管理をする力」(-0.08pt) や「文章を読む力」(-0.04pt) については課題となる。

### 参考文献

楠見孝・南部広孝・西岡加名恵・山田剛史・斎藤有吾 (2017) 「パフォーマンス評価を活かした高大接続のための入試—京都大学教育学部における特色入試の取り組み—」『京都大学高等教育研究』第 22 号, 印刷中。

服部憲児・山田剛史 (2017) 「高大接続を視野に入れた探究型初年次専門科目の設計と評価：京都大学教育学部「教育研究入門」における実践(1)」第 23 回大学教育研究フォーラム発表論文集